

『長生殿』 訳注(五)

竹村, 則行
九州大学大学院人文科学研究院文学部門 : 教授 : 中国文学

<https://doi.org/10.15017/1172>

出版情報 : 文學研究. 98, pp.37-57, 2001-03-30. 九州大学大学院人文科学研究院
バージョン :
権利関係 :

『長生殿』 訳注 (五)

竹 村 則 行

凡 例

- 一 『長生殿』本文の底本には、現在最も流布している徐朔方氏の校注本を用いたが、厳密な校訂を施した呉梅校本（劉世珩『彙刻伝劇』所収）を始め、次の第二項に掲げる諸書も随時参照した。
- 二 本訳注に当り、出典の確認や本文の解釈等に以下の諸書を随時参照したが、訳注の際にはこれを一々明示していない。

塩谷温 『国訳長生殿』（『国訳漢文大成』所収、一九二三年）

徐朔方校注 『長生殿』（人民文学出版社、一九五八年）

曾永義 『中国古典戲劇選注』所収 『長生殿』（国家出版社、一九七四年）

蔡運長 『長生殿通俗注釈』（雲南人民出版社、一九八七年）

- 三 本訳注では、主に前記参考書に於てなお未注の故事出拠について注出する事にした。全般的総合的な注については、康保成・竹村則行共著『長生殿箋注』（中州古籍出版社、一九九九年）を参照されたい。

四 【曲牌名】に続く「唱」部分の訳出は、時にこの間に挟まれる短い科白や襯字をも含めて、【ゴチック文字】の体裁で示した。また、演員の扮装や動作、及び唱や動作の主体を示すト書きの部分は、底本の通りに小字で示した。

五 訳語のうち、原文の「介」「科」(しぐさ)は、一種の術語として、そのまま「介」「科」として訳出した。

六 訳文は、【ゴチック文字】で示した「唱」部分の訳出を含め、荘重な韻文の形式を採らず、意味内容の解釈を重視しつつ、努めて平易な日本文となる様に留意した。(「唱」部分の韻文訳出は今後の課題である。)それでも、訳者の誤解や力量不足による生硬な訳文を免れなかったかも知れない。諸先生の忌憚ない御指教をお願いする次第である。

七 前稿「『長生殿』訳注(一)〜(三)」は『中国文学論集』二十六〜二十八号(九州大学中国文学会、一九九七〜九九年)に、また同(四)は『文学研究』第九十七輯(九州大学文学部、二〇〇〇年)に訳載した。

八 本訳注(五)(第十七〜二十齣)は、一九九八年五月〜一九九九年一月に行われた九州大学大学院での『長生殿』演習資料を基にして、担当の竹村が改筆浄書した。この間の演習に参加した助手・院生・研究生は次の通りである。

諸田龍美・野田雄史・黄冬柏・角田美和・王展
 蕭燕婉・王毓雯・垣見美樹香・河野真人・土屋聡

第十七齣 合 団

(外、末、副浄、小生が四名の蕃将に扮して登場)「(外)三尺の大刀が雪のように白く光り、(末)腰に帯びた弓

が弓張り月のようにぴんと張る。(副浄) 葡萄の美酒に酔って、顔は臙脂や血のようにまっ赤。(小生) 貂の毛皮の帽子に花を添えて、麗しい出立ちである。」(外) 我こそは范陽鎮東路將軍の何千年である。(末) 我こそは范陽鎮西路將軍の崔乾祐である。(副浄) 我こそは范陽鎮南路將軍の高秀巖である。(小生) 我こそは范陽鎮北路將軍の史思明である。(それぞれ腰をかがめて見える科) これはこれは、昨日東平郡王(安禄山)の命令で、我々の召集があつたので、これから揃って郡王のテントへご挨拶に行くところだ。言いかも終らぬうちに、郡王が幕をあげて出てこられたぞ。(奥で樂器を鳴らし、ラッパを吹く科) (浄が軍装して、蕃族の女と蕃兵を連れて登場)

【越調紫花撥四】勇猛な軍隊を率いて边境を守り、この両眼でしかと胡と唐とを見抜こうとする。 天下の山河を掌中に収めるには、まずこの東西南北四方の勇士をうまく配置せねばならぬ。

俺様安禄山は早に大志を持ち、ずっと叛意を抱いてきたが、これまで朝廷にあつて東平郡王の爵位を授かり、君寵も篤く、富貴を極めたので、その思いも止んでいた。ところが、楊国忠のやつは俺と気が合(注3)わず、俺を范陽節度使に出したが、これは却って狭い籠から飛び出したのが嬉しく、正に大事を謀るのに好都合である。俺様の部下には三十二路の將軍がおり、蕃人と漢人とを併用しているが、それぞれ性格が異なるために腹心の部下として信任しがたい。そこで俺は上奏して、蕃人の將軍だけを一括して登用する事にした。現在の大小の將軍は、みんな俺の一族の者どもである。(笑う科) 全てが俺の意のまま、誰はばかる事もない。昨日、彼らを帷幕の前に召集したが、もうそろそろ揃つたであろう。(衆が謁見する科) 三十二路の將軍、見参します。(浄) 將軍たちよ、楽にせい。(衆) 東平郡王にお尋ねします。我らを召集したのは、どんな御命令でしようか。(浄) 將軍たちよ、今や天高く馬肥ゆる秋、武芸の訓練に絶好である。そこで特に諸君を召集し、共に草原へ行つて、獵場を包圍して、狩獵の競争をしたら実に面白いであろう。(衆) 謹んで御命令に従いま

す。（浄）ではこれから馬に跨り、進軍するのだ。（衆と共に馬に乗る科）（浄）

【胡撥四犯】紫の手綱を軽く引き、（合唱）両手で 紫の手綱を軽く引き、ひらりと馬にとび乗り、甲のひもを引き締める。（行進する科）軍旗が雲のようにきらめき、画かれた龍蛇が急に動いて、天まで駆け上ろうとする。我が軍は奇門の戦術によって九連環の陣型を敷き、眼前の中原の唐朝ぐらい、俺様の屈強の蕃兵にとっては何でもないことを見て取る。（衆が四方に立ち、浄が指示する科）この将兵は身体が頑丈だ。あの将兵は武装が堅固だ。この将兵は荒っぽい縮れ毛にわし鼻。あの将兵は鋭い鷹の眼に胡人の顔。この将兵は弓を満月のようにぱんぱんに引き絞ることができる。あの将兵は鉄鎚を流星のようにぶるんぶるんと振り回すことができる。この将兵は鎗をカシャカシャと風を切つて聞かせることができる。あの将兵は剣をシャラシャラと雨が降るように振り回すことができる。

これらの将兵は、実に山奥から出てきた猛虎のように、英雄たるこの天可汗（安禄山）の威光を輝かせるのだ！（衆が行進する科）（合唱）軍威を振るって、太鼓がドンドンと鳴り、魂もかき消える程。陣列を並べ、角笛の音色がゆったり響き、人馬は疾走したり、ゆっくり進んだり。この人馬の動きに較べれば、雷電とて何程のことがあるう。まことに海原が沸き返り、河川が逆流する勢いである。たとえ銅の壁、鉄の壘とりでであつても、どうして破れないであろう、破れない難関などあるものか。（浄）ここは平坦で広々とした草原なので、ここを狩場として、狩猟をしよう。（浄が蕃人の女と共に高所に立ち、衆は狩場を囲んで、狩猟をしつつ退場）（浄）ここに、ここに狩場を設け、四方から獲物を追い立てる、追い立てる。馬蹄ははつらつとして、つむじ風のように躍動し、弓を絶えず固く引き絞つて矢を急ぎ放つ。まもなくすると、草原を駆けまわる兎や鹿は逃げ場を失つて、身動きもならず、その場にならずくまる。（衆が鳥や獣を射ながら登場）（浄）鷹と犬を放て。（衆が応じて、鷹と犬を放つ科。駆けて退場）（浄）やあやあやあ、一方ですばやく天をつかむ鷹を空に放ち、一方では雲に乗って走る俊足の獵犬を放つて、獲物の行く手をさえぎる。するとたちまち、獲物の山、また山。（衆が登場し、獲物を献上する科）東平郡王に申し上げます。諸将

軍より獲物を献上致します。(浄) 獲物の鳥や獣は兵士どもに分け与えよ。この丘の上で、人馬を少し休ませるのだ。みんなで生肉を炙り、酒を温め、女どもに歌い踊らせ、とことん楽しむのだ。(衆) 承知しました。(皆が席につき、蕃人の女が浄に酒をつぎ、衆は抜刀して肉を切り、酒壺から酒をついで、大いに飲み喰らう科)(蕃人の女は琵琶や渾不是を弾き、衆は太平鼓板を打つ)(合唱) この美酒を金盃に満々とつぎ、金盃に満々とつぐ。更に毛のついたままの鮮血したたる生肉を喰らい、笑いながら蕃人の女の赤い両頬を抱き寄せ、琵琶をジャランジャランとかき鳴らし、新曲の菩薩蛮を唱う。(浄が起つ科) ひとしきり喰らって、酒に酔い、肉も食い飽きた。日も暮れたし、將軍たちはそれぞれの陣地へ帰り、兵器を整え、軍馬を馴らして、軍令を待つがよい。(衆が応ずる科) 承知しました。(共に馬に乗り、法螺を吹き、帽子を斜めにかぶり、手を振って舞台を回り、疾走する科) 命令を聞き終ると、將軍たちはさっと身を翻して馬に跳び乗り、帽子を斜めにかぶって、手を軽やかに振る。それぞれ持ち場に帰って、辺境を守備する。將軍たちは旗さし物を並べ、戦車の装備を整え、命令一下、凶暴な力を如何なく発揮し、ために天もくだけ散り、地も波打つであろう。將軍たちは漁陽(安祿山)をじっと注視しており、一たび命令が下れば、矢が放たれたように争って戦場に駆けつけ、漁陽が自分を忠誠あふれる將軍として選んでくれるのを待つ。

(衆が退場)(浄) 見てみる、四方八方の蕃人の將軍は、どれもこれも人馬共に強壯であり、俺様の羽翼の助けはもう十分だ。(笑う科) 唐の天子よ、唐の天子よ。あんたはどうして俺にかなうものか。

【殺尾】唐朝が知らぬ間に、俺はまずあの邪魔者の漢人の將軍を追放し、策謀の下に、この股肱の蕃族の將軍を密かに補強した。華清宮での玄宗の霓裳雨衣曲が演奏し終わらぬうちに、この俺様の漁陽の勇將たちが攻め太鼓を鳴らして謀叛を起こすであろう。

六州の蕃人の將軍が軍馬に乗って行軍し、

薛 逢

軍馬が広大な漢の天地にいなないている。

劉 禹錫

馬は羽が生えたように風を打ち、戦闘が開始され、

駱 賓王

流血で、山河はたちまち見渡すかぎり真っ赤に染まる。

胡 曾

注

(1) 原文「貔貅」：勇猛な軍隊。『西廂記』第二本の楔子に、杜將軍曰く、「羨威統百萬貔貅、坐安辺境」と。

(2) 原文「迭辦」：うまく配置する。「梧桐雨」第二折に「囑付你仙音院莫怠慢、道与你教坊司要迭辦」と。

(3) 原文「叵耐楊国忠那厮、与咱不合」：「梧桐雨」楔子に、「叵奈楊国忠這厮、好生無礼」と。

第十八齣 夜 怨

【正宮】 【破齊陣】 【破陣子頭】 (旦が登場する) 天子の深い御寵愛はなかなか忘れられるものではなく、歡樂の情は濃やかで格別にいと嬉しい。【齊天樂】 天子と私は、あたかも並んで泳ぐ比目魚か、並んで眠る鴛鴦か、恩愛の情が少しでも揺らぐことなど考えられない。【破陣子尾】 ただ恐れるのは、浮雲が風に吹き寄せられること。あのあだ花(梅妃)がこの私と日ごと艶麗を競うのをどうしたものか、毎日心配でならぬ。

【清平樂】 「私は御簾を捲きあげてじつと黙りこむ。千々に乱れるこの愁いを一体誰が知ろう。私が恐れるのは、春の光のような君恩に定めがなくなり、知らぬ間に愛情をかき乱されてしまうこと。今も心中に疑ってみたが、天子の御行跡が日頃と全く違うのではなおさらのこと。天子は一体どちらへお出かけなのか。私は日暮れの宮殿に寂しくお帰りを待つのみ。」 私は楊玉環、久しく天子の御恩顧を受け、天子と情愛で結ばれており

ます。ところががまんならないことに、梅の妖精の江采蘋が私と張り合おうとします。うまいことに、彼女は御意に逆らったので、天子は彼女を上陽宮の東楼に移しました。ただ心配なのは、江采蘋が逆転の計略をめぐらすこと。天子は梅妃との旧情をお忘れでないので、私は常に用心しています。おお、江采蘋よ、江采蘋、これは私があなたを容認できないというのではありません。ただ、私があなたを受け入れるとしても、あなたは恐らく私を承知しないでしょう。天子は今朝早く朝廷へお出かけになり、日も暮れたのに、まだお帰りになりません。私はしきりに永新や念奴に事情を探りに行かせていますが、この心情は何ともやりきれません。

【仙宮入 双調過曲】【風雲会四朝元】【四朝元頭】線香は燃え尽き、深宮は日が暮れる。私は飾り窓を何度も開けて、翡翠の御簾を高く捲きあげ、穴のあくほど眼をこらして天子のお帰りを待ち焦がれる。いつもならこの時分、いつもならこの時分、【会河陽】天子はとくに西宮へお帰りになり、手を取り、肩を並べ、【四朝元】部屋の窓に花の影が揺らぎ、喜色満面で、【駐雲飛】満ち溢れる歓楽に浸っているところなのに。ちっ、今夜はどうしたことが、【一江風】我が愛しい人は、夕暮れになってもお帰りにならぬ。(奥で鸚哥が「天子のお出まし」と叫ぶ介) (旦が驚いて見る介) やっ、いらっしやった。(見る介をする) へっ、何と 鸚哥の巧言が、恋に煩い悩むこの私をだましおった。

【四朝元尾】私は是非もなく、うろついたり、たたずんだりして、思いあぐねて欄干にもたれるばかり。

(老旦が登場)「聞けば、君王は前殿にお泊りになるので、こちらでは陛下を迎える赤い提灯を撤収したのと。」「(会う介) 貴妃様に申し上げます。陛下は既に翠華西閣にお泊りでございます。(旦が果然となる介) そんな事が! (泣く介)

【前腔】君王の情愛の何と浅はかなこと。待ち焦がれている人の気も知らないで。待つ身の私は夜のお化粧を落すのもおつくうで、灯芯を切って明るくするのもつらい。君王がいらして共に談笑するのを心待ちにしていたのに。以前は豪華な宴席で、以前は豪華な宴席で、名月の下に酒盃を重ね、^(注)枕を重ねて同じ夢を見、二人はいつも運命を

共にし、心も一つで決して別れないことを誓ったのに、どうしたことか陛下は急に私を遠ざけられる。(老旦) 天子様は今夜は偶々お出になりませんが、決して故意に遠ざけられたものではありません。貴妃様にはどうか悲嘆されません様に。(旦) ちっ、もし陛下が心変わりされたのでないなら、離宮にお泊りになるのに、どうして女官をやって知らせないのだ。思うに天子様は、これまで一度も一人で休まれたことはなく、一人寝はお嫌いはず。どうして今宵の天子の枕辺に、ひっそり閑として誰も添い寝をしない、誰も添い寝をしないことがありましよう。

(貼が登場) 「雪中の白鷺は飛び上がって初めて見分けがつくし、柳樹の中の鸚鵡は鳴いてやっとそれと分る。」

(会う介) 貴妃様、翠華閣の事を探って参りました。(旦) どうだったのだ? (貼) 貴妃様、お聞き下さい。私

めは今し方、【月臨江】「こっそりと翠華西閣へ行き、夕暮れまで見張っておりますと、急に密旨があつて宮中の太監を使いに出しました。」(旦) 太監をどこへ使いに出したのだ? (貼) 「太監は芝居用の馬に鞭をくれ、

灯りを消して紅裙の宮女を召されました。」(旦が急いで尋ねる介) どの者を召されたのか? (貼) 「東楼に遷さ

れた怨み深い女、梅亭の昔のお妃でございます。」(旦が驚く介) おお、梅妃のことだ。で、彼女は来たのか?

(貼) 「使者はすぐさまその佳人を取り囲み、闇の中を翠華閣へと帰ってゆきました。」(老旦が問う介) その話

は確かですね? (貼) 「探って来た情報は真実のものです。」(旦) えい、天よ、何と梅妃が恩寵を復活したの

だ。(黙って坐り込み、涙を手で覆う介をする) (老旦、貼) 貴妃様、どうかお嘆きなさらぬ様に。(旦)

【前腔】事の次第を聞いて驚きふるえ、傷心のあまり声も出ない。(涙する介) 陛下のこれまでの御厚情と御恩顧とを、私は流れる涙に托して天に訴える。思えば、二人が始めて契りを固めたとき、二人が始めて契りを固めたとき、記念に賜った金釵のように二人はいつも相並び、螺鈿の小箱のように二人はずっと円満でありたいと願ったもの。それなのに思いもよらず、陛下がこうも急に心変わりなさるとは。どうせ私に非があるのなら、ちっ、その罪状をつけてほしい。なのに、どうして陛下は、寒い冬に咲く梅の花に暖かい春風をそそがれるのか。道理で、陛

下の御身はこちら側でも、その心は別院にあったのだ。嘘の情愛で私をごまかし隠し、私を欺かれたのだ、私を欺かれたのだ。

(貼) 貴妃様はご存知ないでしょうが、私が聞いた太監の噂によると、昨日天子は華尊楼で真珠一斛を密かに梅妃に賜りましたが、梅妃様はそれをお受けにならず、一詩を返上されたそうです。その詩に「長門宮に遷されてお化粧をすることもない私に、真珠など賜っても何の寂しさの慰めになりましたよ」とあったので、今夜のお召しになったそうです。(旦) お、なるほどそうだったの。私が知るはずもないわ。

【前腔】梅妃が楼東で怨詩を書く、天子はこっそり真珠を賜った。二人の情愛がかくも分ち難いとは、私の心は知らず知らずに切り刻まれる。これは私の度量が狭いのではない。君王が人を見損なったのが笑止、君王が人を見損なったのが笑止。罪人上りの下賤な女を御殿のお姫様にするなんて。もとより私は愚かな鸞鳳、天子の寵愛を争う鶯や燕にはかなわないわ！(老旦) 天子様が梅妃をお忘れでないのなら、貴妃様はどうして御意に合せて、梅妃を召し帰そうとなさらないのですか。そうすれば天子様も喜ばれるし、梅妃も恩知らずなことはいらないでしょう。(旦) えい、その話はおやめ。彼女が天子の愛情の赤い糸(注2)にくるまれているのを、へっ、どうして私が重ねてくるむ必要がある。恐らく私のような興(注2)ざめな仲介人では、かえって彼女の怨みを買うだけだわ。お前たち二人は、私について翠華閣においで。(貼) 貴妃様、お出になってどうされるので？(旦) 私はあちらへ行つて、梅妃が如何に媚を売り、如何に巧みに取り入り、次々に天子の情愛をあおり、天子を夢中にさせたかを見てやるのです。

(貼) 私は、今夜の翠華閣の事が貴妃様に知られるのを恐れていました。今は真夜中、天子様は休まれています。そこへ、貴妃様が急にお出でになれば、具合悪いことになるかも知れません。貴妃様は、今夜はとりあえずお休みになり、明日改めて方法を考えられるのが良いかと存じます。(旦) が黙り込み、涙を手で覆って嘆

く介をする) えい、わかったわ。でも、今夜はどうしたら私を眠らせられるというの!

【尾声】彼女は歡樂の最中、時が早く過ぎ去るのを恐れ、私はこの寂しい宮殿の奥深く、ただ灯火に背を向け、着のみ着のまま、一人寝の夜具にくるまるだけ。

遙かに連なり続く宮殿に、時計の音が響き、

戴 叔倫

水を打ったように静かな宮殿の夜空に雲がながれる。

温 庭筠

君王の愛情は絶えたが、私の涙の痕は絶たれることが無い。

劉 阜

私は熏し籠に斜めに寄りかかって、坐ったままで夜を明かす。

白 居易

注

(1) 原文「向瓊筵啓処、醉月觴飛」：李白「春夜宴從弟桃花園序」に、「開瓊筵以坐花、飛羽觴而醉月」と。

(2) 原文「没頭興」：元・秦簡夫「東堂老」第二折に、「自從去了這趙小哥、再没興頭」と。

第十九齣 絮 閣

(丑が登場)「梅妃が上陽宮に閉じ込められて幾歲月、薄絹の衣裳をしつとり濡らして、涙は流れて止まない。夜空には梅妃の蛾眉にも似た三日月、あちらの南宮では歌舞に打ち興じているのに、こちらの北宮は愁いに閉ざされたまま。」私は高力士、千年、閩粵へ使いを奉った折に、江妃を選んで進上したところ、天子はいたく寵愛されました。彼女は、生来梅花を愛したので、「梅妃」の称号を賜り、宮中ではみな「梅妃様」と呼んで

来ました。楊貴妃が入内されると、寵愛が日々に奪われ、天子はついに梅妃を上陽宮の東楼に遷されました。ところが昨夜突然、天子は病気にかこつけて翠華西閣に泊られ、宦官に梅妃をこっそり連れて来るようにおっしゃいました。また求人に宮人に厳命して、楊貴妃には決して知らせぬようになさいました。私に命じて、西閣の前で見張らせ、何人も進入させぬようにとのこと。早や夜明け時、梅妃を送り帰さねばならぬので、私はここに控えておりました。 (退場するそぶりをする) (旦が歩いて登場)

【北黄鐘】【酔花陰】私は一晩中眠られず、愁いにかき乱され、夜明け前にこっそりやって来た。いつもならば、朝日が花木を照らす頃合い、熟睡して目覚めず、布団をかぶって眠り込んでいるところ。ところが今日はどうしたことか、その私が鳳凰の枕を慌てて放り出して起きたのは、ただひとつ天子と梅妃の事が脳裏から離れないため。

(丑が舞台の一方からこっそり登場し、遠くを見る科) おや、向うからやって来るのは楊貴妃様だ。まさか秘密が漏れたのではあるまいな? いま梅妃様は西閣にいらっしやるのに、はてどうしたものか? (旦が着く科) (丑があわてて見える科) 高力士めが貴妃様にお目通り致します。(旦) 天子様はどちらに? (丑) 西閣の中でございます。(旦) 他に誰が内に仕えておるのか? (丑) 誰もおりません。(旦が冷笑する科) では門を開けて私を中に入れなさい。(丑があわてる科) 貴妃様、まあお掛け下さい。(旦が坐る科) (丑) 私め、貴妃様に申し上げます。昨日、天子様は、

【南画眉序】政務に御精勤された余りに体調をくずされ、雑事に煩わされるのをお厭いです。(旦) 天子が御不調とあらば、どうしてここにお泊りになるのです? (丑) 天子は清雅な西閣を好まれ、ここで一晩休息なされたのです。(旦) 西閣内で天子はどうされているの? (丑) ベッドに横になられ、精神の疲れを癒しておいでです。(旦) お前はここで何をしているの? (丑) 門を見張って、人の出入りをさせないでいるのです。(旦が怒る科) 高力士、お前はこの私も入らせないつもりかい? (丑があわてて叩頭する科) 貴妃様、お怒りにならずに。私はただ、君王

の御命に従っているだけでして、どうして貴妃様に逆らうことがありましよう！ (旦が怒る科)

【北喜遷驚】ちっ、うそで言いくるめ、ペチャクチャと人をだますのはおやめ。(丑) どうしてそんなことができましよう。(旦) ますますいらいらして腹が立つ。私には分っているの、お前が今日、別の人の事が気に掛かり、その人の寵愛が篤いので、私のような恩寵をなくした者を騙していることが。(起つ科) いいわ、私は 自分で門をたたくしかないわ。

(丑) 貴妃様、お掛け下さい。私めが門を開けさせます。(高い声で叫ぶ科をする) 楊貴妃様の御到着だ。門を開ける！ (旦が坐る科) (生が上衣をはおり、侍従を連れて登場し、聞き耳を立てる科)

【南画眉序】何事か知らんが突然大きな声がして、朕の眠りを覚ましおった。(丑がまた叫ぶ科) 楊貴妃様だ。早く門を開ける！ (侍従) 申し上げます。貴妃様がいらつしやいました。(生が呆然とする科) おお、これは秘密が漏れたのだ。^(注1) さてどうしたものか？ (侍従) この門を開けますか？ (生) 待て。(背を向ける科) まず、梅妃をカーテンの中にしばらく隠しておくのだ。(急いで退場) (侍従が笑う科) おや、天子様、天子様、黄金の御殿に、どのようにして梅妃様を隠すのですか？ 葡萄棚が急に倒れるように、やはり貴妃様の嫉妬で酸っぱい思いをするのが怖いのですね。(生が登場し、ベッドに臥す科をする) 侍従よ、朕は ベッドに横になり、枕にもたれて眠るふりをするから、お前は 門を開けなさい。

(侍従) かしこまりました。(門を開ける介をする) (旦がずかずかと入り、生に見える介) 陛下が御不例と伺いましたので、特にお見舞いに参りました。(生) 朕は偶々具合が悪くなり、宮殿に行かなかつたまでのこと。わざわざ貴妃が早朝に見舞いに来るまでもない。(旦) 陛下のご病氣の理由について、私には幾らか察しがつきます。(生が笑う介) 貴妃は何を察したというのだ？ (旦)

【北出隊子】恐らくは 恋の煩いで、意中の人のために病氣になったのでしよう。(生が笑う科) 朕は貴妃の外にど

んな意中の人がいよう？（旦）私思いますに、陛下がこれまで寵愛されたのは、梅妃以外にはいませんのに、どうして彼女を召し出して、陛下の気掛かりをなくされないのでですか。（生が驚く科）やあ、この女は久しく上陽宮の東楼に遷しておるのに、どうして再び召すことがある？（旦）恐れますのは、花神（明皇）がこっそりと梅の小枝（梅妃）をのぞき見て、渴きを癒そうとされることです。（生）寡人に、どうしてそんな気があろう。（旦）そうでないのなら、どうして陛下は、一斛もの真珠を贈って、梅妃の寂寥を慰めようとされたのです！

（生）貴妃よ、勘ぐらないでくれ、寡人は昨夜、

【南滴溜子】 たまたま具合が悪くなり、少し休もうと思っただけ。そなたは、聡明な女性の心理でむやみに邪推し、理由もなく人をなじっているのです。（あくびをする科をする）私は 疲れ果てて応答するのも気だるく、会っても話すこともない。どうか車を返しておくれ、私はぐっすり眠りたいのだから。

（旦が注視する科をする）あら、ベッドの下にあるのは、鳳凰を縫い取った靴ではありませんか？（生が急いで起き上り、覆い隠そうとする介をする）どこにあるのだ？（懐中から翡翠のかんざしを落す介）（旦がそれを拾って

見つめる介）おや、翡翠のかんざしがもう一つ！これらは婦人が身に着ける物、陛下は一人寝なのに、どうしてこんな物をお持ちなのですか？（生が恥じる介をする）ほんとに不思議だ。これらはどこから来たのだらう？ 私にも解らないなあ。（旦）陛下がどうして解らないものですか？（丑があわてるそぶりをして、一方で

振り向いて侍従に低く話す介）やっ、しまった。このかんざしと鳳凰の靴をご覧になつては、貴妃様は追求をお止めにならないだろう。お前たちは早く梅妃様をお連れし、こっそりと楼閣裏手の壁の破れ目から出（注）て、東楼までお送りするのだ。（侍従）分りました。（生の背後から退場するそぶり）（旦）

【北刮地風】 陛下の御寝は警備も厳しく、宮殿からも遠いのに、まさか神女が夜中に空を飛んできたのではないでしょう。とすると、この二つの証拠の品は、いったい誰が落したのでしょう？（旦が靴とかんざしを地面に放り

投げると、丑がそつと拾う科をする)(旦)昨夜は誰が御寝に侍ったのですか？ 一体どのように二人は鳳凰や鸞鳥のように仲むつまじくなり、陛下は日が高くなっても朝廷へお出でにならないのですか？ 事情を知らぬ外の人は皆、君王をたぶらかすのは、この愚かな私だと言いますが、実は陛下が別に歓楽の愛の巢をお持ちなのを誰が知りましょう。陛下、早く朝廷へお出で下さい。私はここでお待ちしております。(生)朕は今日は病気で、朝廷に出ることができぬ。(旦)陛下がたとえ、蝶のように楽しい夢を見、波間の鸞鷲のように歓楽を尽くし、疲れ果てて眠くてたまらないとしても、あの宮殿に整列する群臣をどうしてないがしろにすることができまじょうか！

(旦が前に進み、生に背を向けて立つ科をする)(丑がこつそり登場し、生に耳打ちする科)梅妃様はもう帰られましたので、陛下には朝廷へお出まし下さい。(生がうなづく科)貴妃も朕が朝廷へ出ることを勧めるし、ここは無理をしても行かねばなるまい。高力士、お前はここにいて、貴妃を送ってゆくのだ。(丑)かしこまりました。(奥へ向かう科)駕籠を出せい。(奥で応ずる科)(生)「風流人は風流で悩むもの、この悩みは風流人でなければ解らぬ。」(退場)(旦が坐る科)高力士、お前は私をうまくだましたわね！ お前に尋ねるが、このかんざしや鳳凰の靴はいったい誰のものなの？(丑)

【南滴滴金】貴妃にはどうかむやみにお怒りにならずに。私思いますに、天子は貴妃様のわがままを何でも聞いて下さって、真に稀有のことです。今日のこのかんざしや鳳凰の靴についても、かりに梅妃との旧愛が復活したのではなく、天子が後宮の新しい妃を寵愛されたのであっても、貴妃様は、ひたすら知らないふりをされるべきなのに、どうして、こうあれこれと詮索をされるのでしょうか！ これは私めの勝手な口出しではありません。今日の朝廷の百官は誰一人として妾を持っていない者はおりません。まして、畏れ多い天子にあつて、どうしてこの一夜のことが許されないことがありまじょう。(旦)

【北四門子】 おや、これは 私が天子の御寢に他人が待るのを許さず、私の度量がひどく小さいことを言うのではありません。どうしても理解できないのは、天子が陰に日に私を欺かれ、ことさらに私を偽られたことです。(丑) 天子様が貴妃様にうそをつかれたのは、貴妃様がお怒りにならぬ様にてあつて、決して他意はありません。(旦) もし、私のいらだちを恐れるためならば、彼女(梅妃)を迎え入れるのをやめてほしいのです。一体どうして、愚かな浮雲(天子)は別の峰(梅妃)の方へ漂い流れようとするのでしょうか。梅妃を捨てると見せかけて、こっそりと召し出すなど、その心変わりにはまったく分らないわ。

(涙を手でおおって坐る科をする) (老旦が登場) 朝早く起きると、貴妃様がいらつしやらない。きつとこの翠華閣の中でしよう。中に入ってみましょう。(中に入つて旦に見える科をする) あつ、貴妃様、

【南鮑老催】 どうして涙をながし、おし黙つて一人坐り、暗い表情なのでしょう？ (丑に尋ねる介) 高さん、一体誰が貴妃様のわがままな気性に触れたのですか？ (丑が低い声を出す介) 言うまでもないことです。(こっそりかんざしと鳳凰の靴を取り出して、老旦に見せる介) 貴妃様はこの二つの物を御覧になつて、お怒りになつたのです。(老旦が笑つて、低い声で尋ねる介) その人(梅妃)は今どこに？ (丑) とつくに帰られました。(老旦) 天子様は？ (丑) 朝廷へお出でです。永新さん、あなたは良いところへ来た。貴妃様に宮殿へ帰られるように勧めて下さい。(老旦) 分りました。(旦の方を振り向く介) 貴妃様、眉間にしわを寄せ、涙を滲ませてお悩みになりませぬ様。朝食もまだですのに、朝はとつくに過ぎました。どうして大切な玉体を痛めることがありましよう？ どうか 早く宮殿にお帰りになり、楽しくお過ごし下さいませ。

(奥で) 天子様の御到着。(旦が立ち上がる介) (生が登場) 「彼女が媚びるとこの上なく愛らしい。情愛が深ければ嫉妬も深いもの。まずは私の誠意でもって、眼前の彼女を慰めることにしよう。」寡人は、昨夜は梅妃と楽しく過ごそうとして、逆に楊貴妃を怒らせてしまった。貴妃を叱ろうとしても、貴妃に私の梅妃への偏愛を言

どうか怒らずに。(笑って且をのぞく介) そなたの しかめた眉と涙顔を見ると、益々愛おしくなる。

貴妃よ、かんざしと小箱を元のようになってしまうがよい。花を見に行けないのなら、朕はそなたと西宮へ行ってお話しすることにしよう。(且) 陛下が私をお捨てにならぬのなら、私は何も申し上げることはありません。(かんざしと小箱とを袖にしまい、生に福礼をする科)

【北尾殺】かんざしと小箱とを取り出して再びしまい込む。蓮の花模様の帷帳の中で、今宵あの新婚の情愛を重ねて味わうことになる。

(生が且を連れて共に退場) (丑が再び登場) 天子は貴妃様と一緒に宮殿に帰られた。いま私は、このかんざしと鳳凰の靴を梅妃様にお返しに行こう。

梅妃のいる翠華閣に、柳の若芽がとりどりに芽吹いたころあい、 司馬 札

折りよく君王の御車が来て、逗留している。 銭 起

だが、楊貴妃の嫉妬の深さをどうして知ろう、 段 成式

その嵐は天子を大いに悩まして、まだ止まない。 羅 隠

注

(1) 原文「春光漏泄」：杜甫「臘日」詩に、「侵陵雪色還萱草、漏泄春光有柳條」と。

(2) 原文「悄從閣後破壁而出」：「破壁」の意、塩谷国訳本、蔡氏通俗注釈本ともに「壁を破って」の意に解するが、この緊急場面の情況に合わないであろう。ここは密会の楼閣裏手の「破れた壁」と解するのが適当と思われる。蘇軾の「過広愛寺」詩に、「破壁撼鐘音」と。

第二十齣 偵 報

(外が、中隊長に扮した末や、刀や棍棒を持った四名の雑兵を連れて登場)「我らは辺境で堅固な城を守っているが、安祿山のいる辺防の状況を聞いて実に驚いている。ために、私は国を憂えるあまり、白髪が何本も増えてしまった。」本官は郭子儀、皇恩によって靈武太守を拜命しております。私は以前に、長安で安祿山の顔に叛逆の相があるのを見て、彼奴が悪計をたくらんでいるのが解った。ところが思わぬことに、天子は彼に范陽の鎮護を命じられたが、これは虎を野に放つようなもの。加えて天子はその大将を蕃族に取り換えることを許可されたので、やつはますます爪を研ぎすましている。本官は天徳軍使に昇任して以来、日夜このことを憂えています。ここ靈武は、天子のお膝元の要地であるので、嚴重に守護しなければならぬ。私はすでに斥候を出して、范陽の動静を探りに行かせた。斥候が帰って来れば状況が分るであろう。(小生が斥候に扮し、紅旗を持って登場)

【双調夜行船】私は流れ星や稲妻のように早く駆け、辺塞の状況を探る。急いで范陽を離れたかと思うと、早やここ靈武にやって来た。(前に進み出て外に会い、片ひざをついて挨拶する科) 太守様へ 雷のような大声でご挨拶致します。

(外) 斥候よ、帰って来たか。(小生) 私は「肩に『令』字を書いた紅旗をにない、昼夜風のように速く走りました。私がそうして探り得た辺境の種々の情報を、全て太守様へ御報告します。」(外) 門を閉めよ。(衆が門を閉める科をして退場)(外) 斥候よ、お前が探った安祿山軍の状況はどうだ? 兵力はどんなだ? 近くに寄つて、仔細に私に聞かせよ。(小生) 太守様、お聞き下さい。私めが范陽に着きますと、

【喬木魚】槍や刀が雪のように白く輝き、騎兵が兵營にびっしりと並んでいるのが見えました。彼らの号令はまる

で山のように響き、鬼神をも驚かすほどです。彼らが朝廷の天子を敬うことなどどうしてありません。彼らはただ安祿山將軍の威令を外に誇りたいだけなのです。

(外) 安祿山のやつは、辺塞では近頃どんな様子だ？ (小生)

【慶宣和】 やつは天子にお願いして、漢族の將軍を更迭して蕃族の將軍に取り替え、四方に腹心を配置しています。また毎日のように馬を走らせ弓をひいて狩りをし、軍の威勢を高め、高めております。

(外) ほかにどんな動きがあるか？ (小生)

【落梅花】 彼奴の動静は測りがたく、腹黒くて邪惡の限りを尽くしています。蕃將どもを誘って密かに結託し、天下の亡命者をもこっそり招集しており、その巢窟内はならず者で一杯です。

(外が驚く科) やあ、そんな事が！ しかし、朝廷にはその事について上奏する人がいない訳ではあるまいに。

(小生) 聞くところでは、一カ月前に京都で、ある人が安祿山の謀叛について上奏しました。そこで、天子は密かに使者を范陽にやつて動静を探らせましたが、あの安祿山は使者に会うと、

【風入松】 十分に注意をして礼儀正しくし、自ら愚鈍を装い、金品をばらまいて、その悪計を隠し通しました。使者の宦官をだまして心から満足させたので、使者は朝廷への報告でその謀叛の様子を隠蔽したのです。それで天子はいよいよ安祿山を信じて疑わず、却って謀叛を告発した者を安祿山軍へ送って処罰したのです。こうして彼奴は横行のし放題、誰が一体敢えてその事を口に出しましょう！

(外が嘆く介) そのようであれば、どうすれば良いだろう。(小生) 先日、楊丞相が上奏され、安祿山の謀叛は明白であるので、極刑を下されるように天子に申し上げました。あの安祿山は、この上奏文を見るや、

【撥不断】 足はもつれ、ため息をつき、心中びくびくおどおどしていましたが、思いがけず、勅旨には、安祿山が誠実であって、楊丞相も疑念を抱くには及ばないとありました。彼はこのことを聞くと、すぐさま呵呵と大笑し、

「佞臣がこの俺をどうすることができよう。俺は誓って君側の奸臣を殲滅し、怒りも猛々しく、この怨みを晴らしてやる」といつております。

(外) やっ、彼奴が君側の奸を除くだと？ これは謀叛でなくて何だ？ 待て、楊丞相の上奏文はどうして官報にないのだ？ (小生) これは密奏なので、もともと副本は作りません。ただ楊丞相が安禄山をそそのかして早く謀叛を起こさせるために、特別に軍報で副本を送付させたのです。(外が怒る科) えい、外には謀叛の節度使、内には奸臣の丞相か。全く人を激怒させるものよ。(小生) 私が更に聞いたもので、安禄山が近日兵馬を献上する一件は、もつと重大です。

【離亭宴歌拍殺】 奴はもとから、狼の本性をあらわにして、密計をたくらんでいます。馬を献上するという名目にかこつけ、勢力をたのんで強奪するつもりです。(外) 馬を献上するだと？ もつと詳しく説明しろ。(小生) やっは何千年に上奏させ、献上馬三千匹、各馬に武装兵士二名と御者二名、馬飼い一名が付き、合計三×五の一万五千人が馬を護送して入京する事を上奏しました。その道中の 猛々しい兵士と暴れ馬の騒々しい行列を、どうして防ぎとめることができましょう。こんな乱暴な一団は鎮圧もできず、誰もそれを阻むことができませぬ。こんな粗暴な兵士が都に入り、野性の荒馬が宮城に至れば、長安は大騒ぎになります。(外が驚く科) おおっ、しまった。この計略が実行されれば、長安が危ないぞ。(小生) この上奏文は朝廷へ進上されたばかりで、まだ陛下の御裁可を得ておりません。ただ安禄山は、明白に天子を欺き、悪だくみをめぐらし、危険な罟を仕組んでいます。荒馬は野放しにできず、狼の本性は抑え難いもの、やがて彼奴のいる漁陽からの攻め太鼓が響いて来ましょう。太守様、朝廷方の準備が整うのを待ってはいりませぬ。私めは、紅旗をひらめかせながら探偵し、今後更に報告をします。

(外) 分った。卿への褒美に酒がめと羊一頭、銀五十兩を取らせ、一月の仕事を免ずる。下がってよい。(小生

が叩頭する科) ありがとうございます。(外) 者ども、門を開けよ。(衆が応じて登場し、門を開ける科) (小生が退場) (外) 將軍よ。(末が応じる科) (外) 兵隊どもに伝えよ。明日練兵場で軍事演習を行ない、そのあと酒宴をひらいて慰労する予定であると。(末) かしこまりました。(先に退場)

(外) 安禄山の漁陽の動静を探った数騎の使者の報告では、
杜 牧

安禄山は既に八陣の陣形を整え、風雲急を告げているとのこと。
劉 禹錫

(外) それがし郭子儀の胸中には、辺境安定の為の秘策があり、
曹 唐

官軍の軍令が厳格にゆきわたる中、何度も酒杯を挙げる。
杜 甫